

第二節 神父マノエル・ポルタルの震災詳説 その一

Ⅰ 聖霊修道院 聖職者と居住者の受難

承 前

論文第四 ポルトガル聖職者のリスボン震災記録

第一節 神父ペレイラ・ド・フィゲイレドの震災記録

## 第二節 神父マノエル・ポルタルの震災詳説 その一

### Ⅰ 聖霊修道院 聖職者と居住者の受難

リスボン大地震の被災証言のなかでもっとも大部で詳細であるのは、おそらくオラトリオ会の神父マノエル・ポルタルの記録であろう。同じ修道会に属するペレイラ・デ・フィゲイエイレドの報告は、前節で検討したように一般的・総括的文書と考えられるが、ポルタルの著作『史話 王都リスボンの壊滅史話』では主として執筆者自身の体験と周囲の被災状況がきわめて精細に語られる。

一七五六年に公にされたこの著作は、残念ながら現在入手できない。しかし、幸いにも一九一九年研究者ペレイラ・デ・ソーサによって大著『ポルトガル地震一七五五年十一月一日とその人口学的研究』のなかに主要な部分が採録された。ただし、ポルタルの膨大な論述を、ソーサは原典における順序ではなく、自著の構成と展開に即応させ、多数の段落に分割して引用している。本稿ではこの震災記録をできるだけだけ時間の経過に沿って復元し、主要な段落の試訳と検討を試みた。

ポルタルによって綿密に描写されるオラトリオ会聖霊修道院は、リベイラ王宮の北西、ノヴァ・ド・アルマダ街にあった。この坂道は一五世紀に形成された新街界隈に属し、中腹に位置する聖霊修道院から、登ればシアード地区のカルモ修道院やサン・ロケ教会へ、降れば王宮広場や河岸地区に通じる。延々たる神父の証言は、まず聖霊修道院における万聖節の前夜から始まる。

ノバ・ド・アルメダ街のオラトリオ会修道院が不運にも大地震に直撃され、倒壊と破壊に至る哀切で劇的な経緯について物語を始めよう。災禍に覆われた九カ月間の出来事を網羅したいが、八月一日すなわち今日もまた、大地の揺れを感じたという有様である。

この記録を挿話で始めることを許して頂きたい。果たすべき目的のため、腹藏なく語らざるをえないからである。それに続いて凄絶な一日の惨事と悲劇について叙述しよう。

あの日に先立って、わが身に生じた不吉な出来事をまず率直に語りたい。以前からマヌエル・ディアスの美事な製作、主イエスの十字架像を私は持っていた。手に入れたのが大層嬉しく、あの世への旅立ちにも、道連れにしたいい気持であった。その十字架像には神の御業が崇敬の念をもって表現されていた。

万聖節の前日いつもの説教を済ませた私が、同僚の数人から聞いたのは小さな地震、人によっては気づかぬほどの地震が二度起きたことである。それを気にもしないで僧坊に戻ったが、そこでは道路側の壁は漆喰にひびが生じ、かねて割れそうでもあったので、反対側の片隅で横臥した。しかし、なんらの心配も感ぜず、眠ったのである。

眠りに落ちると、その十字架像が夢に現れ、もはやそなたの目に主は映じないと告げる。夢枕で私の心は深く傷つき、わが罪の赦免を主に哀願する。必死の思いである。主のお応えは変わらない。懇願を続けながら、苦悶は増し、恩寵を賜るのは絶望的と感じた。やがて目覚めた私は、陰鬱な気持である。床を離れたあと、一抹の困惑と深い苦悩に包まれながらミサに参じた。それが済むと、個別の祈祷をするため僧坊に戻った。

ポルトルの震災記録は被災の規模と状況について際立って精細であり、これを充分理解するためには、修道院における組織や生活について基本的な事柄を知る必要がある。ヨーロッパにおける修道院の原型は、六世紀イタリアの聖者ベネディクトにより造られたとされる。「我ら自身の力は充分ではないが故に、主に向ってその恩恵の助けを与えられんことを希う。」「各人が生来非力であるために、神を求める人たちがひとつの共同体をなし、相互の敬愛と支援のもとで錬磨する必要がある。されば我らは主の奉仕のための学校を建てよう。それには廠

---

Manoel Portal, *Historia da ruina da cidade de Lisboa*, pp.18-28. in F. L. Pereira de Sousa, *O*

*Terremoto do 1.º Novembro de 1755 e um Estado Demografico*. Lisboa, 1932. Volume III, pp.

614-615.

格にすぎず永遠の命に達するところにあった。

こうした『戒律』を始原とするベネディクト会は、グレゴリウス一世はじめ歴代のローマ教皇に教導され、中世の主要な修道会としてヨーロッパ各国へ広がった。ベネディクト会で求められる誓願は、定住、従順、純潔の三項目である。なかでも定住誓願、一定の組織に所属し、そこに住居を定める誓いは、修道院発展の重要な貢献とされる。

さて、ノヴァ・ド・アルマダ街における万聖節の朝について、ポルタルはつぎのように語る。

礼拝規定書に定められた小部屋でしばし寛いだことを憶えている。ジョアン・バリボサ神父が来られてまもなく、新回廊に沿う小部屋の床板が揺れ始めた。床板が軋るのに気づいた私は、すぐに地震だと悟り、神父に続いて庭園とは逆の方へ急いで逃げた。もしも地階の回廊から食堂へ向っておれば、命を失ったであろう。バリボサ神父が先に進み、門を潜る際に背後を振り返った私は、横転する木箱と作業台の間に倒れた。頭上で回廊の屋根が崩れ、礼拝堂の上に倒壊する。向側の新回廊ではディオゴ・ヴェルネイ神父はうずくまる。私とは言えば、身体が埋れたものの、石などは落下せず、頭の痛みもない。地震は七分間続き、その間死の接近を刻々と感じながら、鎮まるまで神に慈悲を求めた。

震動が止んでも、身動きができず、動揺して大声で救助を求めた。神の御心によって窓辺から脱出できた方々、フランシスコ・ダ・カルバコ副修道院長、ホウチスモ修道士、アントニオ・ゴンサルヴェ修道士、さらにはジョアン・バリボサ神父と商人のマヌエル・ゴンサルヴェ氏など、大いなる博愛を發揮され、みなで私を救出したのである。岩石が両脚を塞いで、それを持ち上げるのに人手を要し、私の衣服も裂き破れた。救い出されたのは幸運であるが、脚は腫れ、目は血に染って、重傷の身で庭園の方へ這い上ったわけ

石原謙著『キリスト教の展開』岩波書店、一九七二年。五五五七頁。

ファン・ラーレン著『平和の山』エンデレル書店、一九五六年。一六九―一七二頁。

ある。

ポルタルが所属するオラトリオ会は、十六世紀中葉のローマで聖フィリポ・ネリによって設立された。歿後聖者の列に加えられるネリは、一五一五年フィレンツェで市庁公証人の家庭に生まれた。マルチン・ルターによって宗教改革の口火が切られる二年前である。つとにフィレンツェでは一四八二年ドミニカ会修道士ジローラモ・サヴォナローラがサン・マルコ修道院へ就任し、メディチ家の独裁とローマ教皇庁の腐敗を説教壇から痛撃した。やがて彼は政治の実権を掌握し、フィレンツェから奢侈の一扫を図ったが、神権政治への反発も強まり、一四九八年宗教裁判の結果火刑に処せられた。こうしたサヴォナローラの事蹟はボヘミアの神学者ヤン・フスの受難とともに、宗教改革の先駆とされる。その後もフィレンツェではサヴォナローラへの敬慕が秘かに保たれ、公証人ネリも深く尊敬していた。敬虔な少年フィリポもサン・マルコ教会におけるドミキカ会の礼拝と説教にしばしば参じたとされる。後年彼はドミニカ会について語るところによれば、脳裡にある叡智はすべてサン・マルコ教会神父たちの賜物なのである。

十七歳にしてネリは富裕な親戚へ養子に出されたが、家業の織物取引に打ち込めず、山上のベネディクト会修道院へ頻繁に赴いた。信仰の道を歩もうと、一五三三年彼はローマへ旅立ち、しがない労務で生活の糧を得ながら、病人や巡礼への奉仕活動を続ける。

サン・トマス教会の司祭に彼が叙階されたのは、一五五一年三五歳のときである。やがて彼を囲んで小人数の信者が定期的に集まり、礼拝堂での会合を意味してオラトリオ会と呼ばれるようになった。これらの人たちと慈善事業に携わるネリは、出先の聖ヤコブ病院でイグナチウス・ロヨラと巡り会った。

すでに一五三四年ロヨラは六人の同志とイエズス会を結成し、一五五一年にはカトリック随一の中等教育機関、コレジオ・ロマーノを設立した。この間ロヨラの同志フランシスコ・ザビエルはインド、マラッカ、日本へと伝道の旅を重ね、

---

Portal, *op.cit.*, pp.2-8. in Sousa, *op.cit.*, Volume III, p. 615.

Louis Ponnelle et Louis Bordet, *Saint Philippe Neri et la Societe Romaine de son Temps* (1515-1595), Paris, 1927. pp.17-18.

柳沼千賀子著『聖フィリポ・ネリー喜びの預言者』ドン・ボスコ社、二二―二七頁。

コレジオ・ロマーノ開校の翌年中国で逝去した。宗教革命によって苦境に立つカトリック勢力を、イエスズ会と同じくオラトリオ会も刷新する役割を担った。シトー会など中世の修道会は山里への隠棲と瞑想等の修行を主眼としたが、これら新たな修道会、いわゆる托鉢修道会は都市における住民の教化と救済を重視した。しかし、軍事的な規律と海外への布教を重視するイエスズ会とは異なり、ネリのもとでは会士相互の敬愛と隣人への慈善事業に力点が置かれた。ベレット著『聖フィリッペ・ネリーオラトリオ会の創設』にはオラトリオ会士の日々が過ぎるように叙述される。

オラトリオ会修道院では朝食、昼食、夕食の前後に宗教書の朗読がなされた。ほぼ同じ年齢の青年ふたり、僧衣を許されたばかりのジェルマニコ・フェデリとオクタヴィオ・パラヴィシニが、一週交代で朗読を担当した。

朝食と昼食の際には聖書と近代語の宗教書が読まれ、夕食のときには勤行や良心のありかたについて話し合う。共同の僧坊で会士たちに序列はなく、それを望む者もなかった。すべての会士がたがいにも目上の人として敬愛したのである。

彼ら全員が首長、院長、慈父として尊敬したのは、フィリッペ・デ・ネリだけで、この方は聖ジェローム僧坊の深奥で、温情と慈愛に満ちた威厳に輝いていた。

宿舎も食事も給費もみな共同であった。彼らは人間の集団と言うよりも、むしろ天使の集いを思わせた。こうした聖職者の宗教的な共同体にフィリッペは、憲章ともいべき少数の規範を成員の合意で設けることを希望した。この規範は全員一致でもなく採択され、忠実に実施された。

軍隊的な秩序と規律を強調するイエスズ会とは対照的に、オラトリオ会ではこのように合議と対等を基本とする。とくに管理の中枢である修道院長についてはつぎのように規定された。

修道院長の任期は三年間であつて、再選は可能であつた。

修道院長に格別の榮譽や特権はなく、なにびとよりも多大の労苦と重大な責任が課せられた。

修道院長は別格に扱われるのは、聖歌を奏するときと食卓に就くときだけである。

修道院長は厳格で峻厳な統率ではなく、心優しく寛容な指導に努めねばならない。

一六一一年ルイ十四世治下のフランスで、母后マリ・ド・メディチの聴聞司祭、ピエール・デ・ベリュレ枢機卿によつてオラトリア会が結成され、この修道会でデカルトを継承する哲学者ニコラス・マルブランシュやジャンセニズムの論客となる神学者パスキエ・ケネルが育てられた。さらに一六五九年リスボンでは、王室礼拝堂の司祭バルトロメ・デ・ケンタルメがオラトリオ会を設立し、一六七四年シャイド地区ノヴァ・ド・アルマダ街に聖霊修道院が建設され、施療院も付設された。ここでも創立者聖ネリとオラトリオ会初期の遺風が継承され、会士相互の敬愛と扶助が重視されたことは、ポルタル神父の被災記録からも充分察知できる。

ジヨゼ・クレメント神父は先見の明と凜とした気概を示される方であるが、信者の告解を受けたあと、工事中の門口で地の揺れを感じたため、一階の僧坊へ走り、開け放たれた窓辺に身を支えられた。窓枠を握り締めた神父は、新回廊の屋根が落ち、土台もろとも僧坊が崩れるのを目撃する。食堂の上には穹窿も倒壊した。そのときわれらの恩師、フィリップ・ネリ神父の悲鳴が聞えた。きわめて博学で高德なこの方が、最期には瓦礫に埋もれ、背中しか見えなかつた。恩師が柀席の方へ歩かれる姿を、ミサのあと聖歌隊席から見たばかりである。

震動が止むと、クレモンテ神父は瓦礫を押し分け、事なきを得た。すぐに彼は周囲に告解を促し、私も一緒に告解を行った。それも終わらぬうちに、血を洗い落とした修練士バルソソ・デ・アルメイダが、脇に来て告解に参

加した。修練士のホウリスノと看護人マノエル・ディアスの安否を確かめるため、ほかの人たちと一緒に彼も新回廊から駆けつけたのである。ホウリスノとマノエル・ディアスは階段を降りて地階の下の道を辿り、アントニオ・ペレイラ神父を救出した。この方は受胎祈祷室で地震を感じ、上の回廊へ階段へ急いだとき、第二の揺れに襲われが、そこで震動が止むのを待ち、幸運にも荒墟から救出されたのである。他方このとき長い回廊を走っていた修練士バルトロメオ・デ・アルメイダは、転倒して瓦礫に埋もれた。しかし、奇蹟的に救出され、かなりの負傷もまもなく快癒した。

同じ回廊でヴィセンテ・コラソ神父と修練士の介護人が絶命された。神父は以前から病身であるものの、徳高き読書家であられた。医薬を捧じて介護人は、とりわけ聖オラカオの勤行に励んで、主キリストと聖母マリアの受難、さらにはこの聖者の艱苦に感銘を受け、托身のヨハネと呼ばれていた。

脚を骨折した若者ジョアンは露台で発見され、やむなくそこを切断したものの、命は取り止めた。荷車の下に身を伏せたところ、満杯の樽が倒れ、脚を砕いたのである。教会が倒れてくる、という叫喚のなかで、とりわけ聖歌隊席の下で多数即死した。祈祷堂の聴聞司祭数名も同じ事態となったが、全員が脱出できた。

修練院のなかで危機に瀕した修練士たちは、みな神に憐憫を求め、慈悲を願った。その建物も古修道院も持ち堪えた。しかし、修練士祈祷堂ではアントニオ・ジョワキム神父と修練士の脇で天井が崩れたものの、聖者フィリッペ・ネリの立像は被害を免れた。また、駆け出した修練士コルネリオは柵席へ倒れ、頭部を打撲したが、気丈に立ち上り、危機を脱した。

ミサを司るジョワキム・フェラス神父とジョゼ・クレメンテ修練士は、震動を感じて修道院の石段へ逃れた。そこに踏み込んだふたりは、石段の破壊を浴びて卒倒する。意識が戻らないまま夜となり、以後三日間そこで死と闘った。この建物では惨事が重なり、日々天災の犠牲者をネセシダスへ埋葬するため、荷車と梯子が運び込まれた。このときとくに熱意を發揮され、称讚的となったのはジョアキム神父である。

惨憺たるこの日、マヌエル・アロウジョ神父は熱病で病床にあり、周囲の破壊で生命の危険に曝されたものの、迅速に駆けつけた人たちが、庭園の安全な場所へ導いた。

どの神父もこの日は悲劇的な場面に曝された。全員が生き埋めとなる危険



も迫った。しかし、食堂の上方にあたる新回廊が倒壊し、五フィート余り瓦礫が積み重なるなかで、神慮によつて中心の障壁は持ち堪えた。新回廊の下方に位置する建物も破壊を免れた。修道院はほとんど壊滅した。修道院の窓に付された新しい装飾も粉微塵となり、身廊へ通じる石段に散った。調剤室と石造の門も倒壊し、数名を即死させた。新穹窿も同じく崩れ落ちる。しかも、無惨にも聖歌隊席へ穹窿が倒壊する前に、聖堂のふたつの身廊が完膚なく破壊された。

ポルトガルにおけるオラトリオ会の創立者バルトロメ・デ・ケンタルメは、一六二六年大西洋に浮かぶサン・ミゲル島の名家に生まれた。この島を中心とするアゾレス諸島は、十五世紀の前半ポルトガル人に発見され、植民地ブラジルへの中継地、さらにはオレンジ輸出の原産地として知られていた。十七歳のとき故郷を離れた彼は、エボラ大学で哲学を修め、さらに数年コインブラのコレジオと大で神学を究めた。バルトロメが最初に聖職に就いたのは、一六五二年リスボンの聖霊教会においてである。やがて彼の篤信と学識は宮廷にまで伝わり、王室に出仕するに至る。ローマの聖職者ジョセフ・カタラノは著書『バルトロメ・デ・ケンタルメ神父の生涯』において左記のとおり述べる。

国王ジョアン四世はバルトロメの敬虔さ、重厚さ、該博さに注目され、一六五四年王室礼拝堂の教導司祭および告解司祭に登用した。こうして豪胆にも彼は、国王の庭園を掃き清める事業に着手するのである。宮殿において刹那的な歓楽が繰り返され、その度に怠惰な人間の疾患が殖えることを、知らぬ者はいない。また、魂の徳操を保つには、宮殿から立ち去るがよい、とも世人は言う。いかにしてバルトロメは奇蹟を成し遂げたであろうか。国王の愛顧を受けて王宮に登った彼は、人々の精神を日々錬磨したばかりでなく、説得力ある助言を要人や廷臣に供した。また、古式の華麗な衣装をば、キリ

---

Portal, *op.cit.*, pp. 2-8. in Sousa, *op.cit.*, Volume III, p. 615.

Joseph Catalano, *Vida do Veneravel Padre Bartholomeu do Quental, Fundador da Congregacao*

*do Oratorio nos Reynos de Portugal*, exposta no idioma Portuguez por Francisco Joseph Freire,

Lisboa, 1747. pp.3, 8-11, 13-14.

スト教の厳格な訓練で懲罰し、一步一步に徳操へと導いて、かくも豊饒な教理を会得させ、修道院のごとく敬虔な堂宇に王宮を一変させたのである。

一六四〇年スペインからの再独立を達成したジョアン四世は、マラッカ、アングラ、ブラジル等で植民地を確立し、一六五七年に逝去した。以後摂政となったその王妃ルイザ・デ・グスマオからもバルトロメは崇敬され、彼女の支援を受けて一六五九年初めてポルトガルにオラトリオ会修道院を設立する。この修道院は彼がかつて勤めた聖霊教会と合体し、以前からそこにある施療院も併合した。バルトロメは宗教書の著述でも知られ、『幼き日のキリスト』（全三巻）、『説教集』（全二巻）、『主日』（全三巻）等が挙げられる。

勉励と研鑽を重んじる聖霊修道院は、この時代にも優れた学者を擁していた。さきに述べたとおり、神父ペレイラ・ド・フィゲイレドは著名な神学者のひとりに数えられ、ポンバル政権の宗教的な参与であった。本節の主題であるマヌエル・ポルタルの著述は、リスボン大地震のもっとも詳細で長大な証言である。さらに修道士ジョゼ・フレイラは前述のジョセフ・カタラノによるバルトロメ・デ・ケンタルメ伝をつとに一七四七年ポルトガル語に翻訳し、やがて一七五八年大地震に直面した王権の膨大な勅令と布告を編纂した。リスボン大地震の危機管理に関する基本的な史料、『ポルトガル王権緊急政策釈義』がそれである。

神父たちも多くは争って戸外へ殺到した。しかし、海嘯によって危険は倍加し、やがて郊外のヴァレ・デ・ペレイレ緑野とネセシダス修道院への避難が始まった。避難の途上アゴステイノ・モンテイコ神父は、聖鉢と聖餅を携えて、説教を続け、告解を聴いたと言う。また、宵闇が迫ると、モンテイコ神父は聖杯を袋に包んで説教を重ね、ベネディクト会修道士アントニオ・コスタ・クト様も、聖歌の斉唱を続けながら、包みを両手で運ばれた。怖るべき日の夜瓦礫の山を越えて、かくも難渋な道を来たことを、クト様は緑野へ着くや、秘蹟の聖杯で祝福されたようである。

私とは言えば、さらなる震動に慄然として、修道院の中庭から出たいと思

つたが、歩行の困難なわが身である。詮方なく急遽ふたりの男に担がれ、積み重なる遺体を押し分けて荷車の足場まで来た。瓦礫の山を越えてサンタ・カタリーナ門へ辿り着くと、そこではアントニオ・ソアレス神父が路上で説教し、告解室から脱出した私の従弟アントニオ・ポンツアスも、上着もなしにキリスト像を手にし、福音を説いて、悔悟を勧めていた。従弟に近づいて、建物に入れぬかと私は尋ねたが、それが遮られた。屋内から逃れた数人がフェレシアノ旧門の路上で悔悟を誓ってる。瓦礫を避けてロレトへ迂回し、三位一体小路に入ると、教会が倒壊している。いかにしても進みたいと念じ、幾度も試みて先に行くことができた。ラルガ街ではマヌエル・ロドリゲス神父の説教を見かけたが、サン・ペドロ・アルカンタラで目にしたのは死者と荒墟だけである。フランシスコ・ボルジェスに伴われ、サン・ロケを出て、修道院前の階段に座った。そこへ家族を連れてフェリッペ・ダ・コスタが来た。そこからタルカ伯爵の豪邸に到ると、もはや歩けない身となった。ボルジェスは従僕のひとりを呼んで、私を騾馬の背に乗せ、他の従僕が手綱を曳いて緑野までと導いたのである。絹糸工場まで来ると、第二の地震が発生し、駆け出した多数の人々が私を囲み、跪いて赦免を哀願する。こうした惨状を抜けてついにヴァレ・デ・ペレイレ緑野へ到着した。緑野の樹の下で寛仁にもジョセフ・フェレイラ様は、椅子を差し出され、ご自身の上衣で私を包んでくださった。

オラトリオ会聖霊修道院は、リベイラ王宮の北西、ノヴァ・ド・アルマダ街に位置するが、この坂道も家々の瓦解と狂躁する住民で遮断された。親友の安否を確かめに登ってきた貿易商ブラドックが、危険を感じて遠ざかった地点である。麓の総大司教教会とサン・パウロ教会は炎上し、王宮広場から河岸地区にかけては、津波も押し寄せた。坂上のシアード地区でもカルモ修道院や三位一体教会が壊滅し、サン・ロケの正門と塔が倒壊するが、負傷したポルタルはやや遠いサンタ・カテリーナ広場へまず運ばれたようである。ここで彼が目撃した情景、すなわち群がる避難民、横臥した傷病者、祈祷や改悛を促す素足の聖職者は、後年ジョアン・クラマの壮麗な油絵に描かれた。

ポルトガルのオラトリオ会は、聖霊修道院に加えてリスボン西南のネセシダス宮殿に、一七四五年広大な教会と修道院を建設した。また、西北の近郊ペレイロ溪谷のコンポリートにも学舎と緑園を有していた。壊滅するノヴァ・ド・アルマダ街を離れた会士たちは、一方ではネセシダスの教会と修道院へ、他方ではペレイロ溪谷の学舎へ避難し、これらの隊列に他宗派の聖職者も加わったことが、ポルトルの記録から判る。

ローマで結成されたオラトリオ会最初の衆会は、ネリを含む六人の聖職者と記録される。やがて会士は一五六七年に十八名、一五七八年には三三名に達し、そこにはスペイン人、フランス人、ギリシヤ人も含まれた。

ポルトルの記録には被災した聖霊修道院について、当時居住した会士の氏名が列記されている。左記のとおりその構成は神父すなわち修道士五十名、修練士三名であり、このほか若干の従僕や炊事婦なども住み込んだであろう。管理にあたる幹事三名もオラトリオ会の会則に準ずるが、幹事第一のモンテイロは地震とは異なる事由で逝去したと思われる。モレイラ・デ・メンドンサ著『世界地震通史』にはオラトリオ会士の死亡四名と誌され、地震のため後日物故したビント神父を別とすれば、ポルトルの記載と合致するからである。

### 聖霊修道院 大地震発生の時点に於ける構成員

#### 新回廊

神父	マヌエル・モンテイロ	修道院幹事第一	死亡
神父	テオドロ・デ・アルメイダ		
神父	ベルナルド・デ・S・パヨ		
神父	ヨアキム・カステロ		
神父	ヴィセンテ・コラソ	地震により死亡	
神父	ルイス・ジヨゼ	修道院幹事第三	
神父	ジヨアン・シュヴァイエ		
神父	アントニオ・コエルホ		
神父	クレメンテ・アレクサンドリノ		

神父 デイアゴ・ヴェルネイ  
神父 フィリッペ・ネリ 地震により死亡  
神父 フランシスコ・ジヨゼ  
神父 アマロ・ペレイラ  
神父 ジヨゼ・クレメンテ  
神父 アントニオ・ジヨゼ 検事総長  
神父 ベルナルド・ロペス 信仰指導者  
神父 フィリッペ・タヴァレス 高位聖職者  
神父 マヌエル・ポルタル  
神父 ヨハキム・フェラス 地震により死亡  
神父 フランシスコ・マヌエル 代理人

古修道院 第一回廊

神父 アゴステインホ・モンテイロ  
神父 ジヨゼ・トロヤノ  
神父 アントニオ・ヴィエイラ  
修練士 ヨアキム・デ・オリヴィエラ  
修練士 ジョアン・ドス・サントス  
神父 ベルナル・ジヨゼ  
神父 ナヌエル・デ・メレ  
神父 ドミンゴス・ペレイラ  
修練士 ジヨゼ・ダ・エンカルナサオ 地震により死亡  
神父 ルイズ・ダ・モタ  
神父 ジョアン・コル  
神父 ヨゼ・ピント 地震により後日死亡  
神父 ジョアン・バルボサ  
神父 アルベルト・ドス・レイス  
神父 エスタシオ・デ・アルメイダ  
修練士 フランシスコ・ザビエル  
修練士 フランシスコ・デ・カルヴァルホ  
神父 ジョアン・フレイレ 修道院幹事第二  
修練士 ジヨゼ・ドス・サントス

修練士 ジョゼ・フェルナンデス  
神父 マノエル・フェレイラ  
神父 アントニオ・ペレイラ

古修道院 第二回廊

神父 ジョアン・バチスタ  
神父 アルベルト・カエタノ 司祭  
神父 バルソロメウ・キンテラ  
神父 ジョゼ・デ・ファリア 聖具保管係  
修練士 マノエル・ジョアン  
神父 ヴアレンチム・デ・ブルホエス  
神父 マノエル・デ・アランジョ  
修練士 アントニオ・ゴンサルヴェス  
修練士 ジョアン・ヌネス  
神父 フランシスコ・デ・サレス  
神父 マノエル・ベルトク  
修練士 ベルナルド・ダ・シルヴァ  
修練士 ジョアン・レイタオ  
修練士 ジョゼ・フェレイラ  
修練士 ドミンゴス・ジョルジエ  
修練士 アントニオ・アンツネス  
修練士 ジョゼ・ペレイラ  
修練士 ジョアン・デ・ソウサ  
神父 ジョゼ・アルベルト  
神父 デイオニシオ・ペレイラ  
神父 ロドリゴ・デ・マトス  
神父 ベルナルド・デ・ブルホエス

修練院

神父 ルイス・カルドソ 修練院教授  
神父 ミグエル・ダ・シルヴァ 修練院助手  
修練士 アントニオ・ヨアキム

修練士 バルソロメウ・デ・アルメイダ  
修練士 ヨアキム・デ・フォイオス  
修練士 コルネリオ・キン  
修練士 マヌエル・デ・ソウサ  
修練士 ボニファシオ・フェレイラ  
修練士 アポリナリオ・ヴィエイラ  
修練士 ヴイセンテ・アマド  
修練士 アントニオ・モレイラ  
修練士 アントニオ・アルヴェルス  
修練士 ジョゼ・ダ・ヴェイガ  
修練士 ジョアン・ファオスチノ  
修練士 アントニオ・ダ・ノブレガ  
修練士 マシウス・ロドリゲス

二〇一四年八月二十九日 初出